

知的障害特別支援学校高等部専門学科の 授業における生徒指導について

～生徒指導に携わる教員に対する調査から～

○小松良平

(秋田県立大曲支援学校)

KEY WORDS: 特別支援学校専門学科

藤井慶博

(秋田大学教育文化学部)

生徒指導 軽度知的障害

I 問題の所在と目的

知的障害特別支援学校高等部において、障害の程度が軽度である生徒の在籍数が増加し、彼らの実態に応じた教育の充実が求められている。このような状況の下、従来みられなかった生徒指導上の課題が指摘されるなど、これまでにない速度で生徒指導の重要性が高まってきており(阿部ら, 2014)、生徒指導を単なる問題行動等への対応として捉えるのではなく、生涯にわたる自己指導能力の育成を目指して行われるべきであり、そのためには生徒指導の3機能の重要性が提唱されている(文部科学省, 2010)。そこで本研究では、知的障害特別支援学校高等部専門学科を対象とし、日々の授業において生徒指導の3機能に関する指導がどのように行われているか調査・分析を行った。

II 方法

全国の知的障害特別支援学校のうち、専門学科を設置している77校において、専門学科を担当している教員(1学級につき担任1名)を対象とし、平成28年2月に郵送法による質問紙調査を実施した。回収率は19.4%であった。

質問項目については、生徒指導の3機能である「自己決定の場を与え自己の可能性の開発を援助すること」「生徒に自己存在感を与えること」「共感的人間関係を育成すること」の観点に基づいた「授業に生徒指導の機能を生かすためのチェックリスト」(岩手県総合教育センター, 2005)を一部改変し、各10項目(計30項目)について、それぞれ5件法で尋ねた。

III 結果と考察

1 自己決定の場を与えることに関する手立て

自己決定の場を与えることに関する手立てでは、「①資料や教材提示の工夫」や「②思考や観察の視点の提示」など生徒の興味・関心を生かし、主体的に学ぶための支援が充実していた反面、「④学習方法、形態の選択」や「⑤一人で熟考する時間の確保」などに課題があると考えられた(図1)。

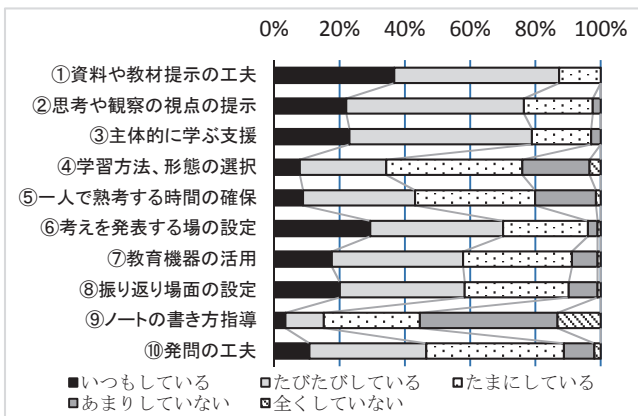


図1 自己決定の場を与えることに関する手立て(n=204)

2 自己存在感を与えることに関する手立て

自己存在感を与えることに関する手立てでは、「⑫存在感をもたせる言動」や「⑰承認や賞賛、励まし」など教師からの関わりが積極的に行われている反面、「⑭多様な学習形態の導入」「⑲多様な考え方の提示」のように生徒同士が互いに学び合う学習内容や方法に課題があると考えられた(図2)。

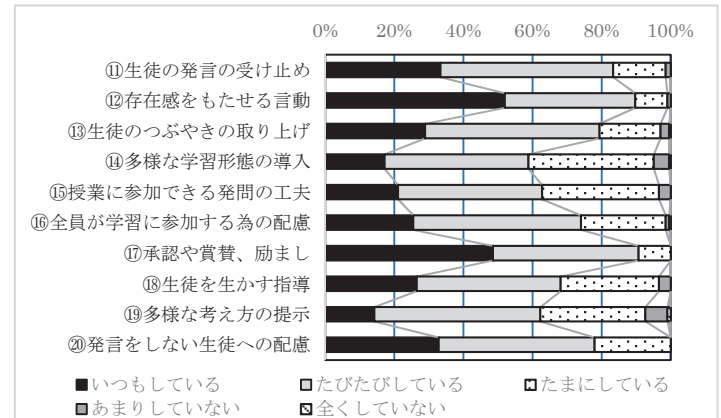


図2 自己存在感を与えることに関する手立て(n=204)

3 共感的人間関係を育成することに関する手立て

共感的人間関係を育成することに関する手立てでは、「⑳良い態度の賞賛」や「㉒様々な発言の受け止め」など、教員自身が生徒に講じる手立てが充実していた反面、「㉘相互評価の導入」や「㉚集団での学び合いの促進」など、生徒同士の相互評価や発言をつなげて集団での学び合いを促すような手立てに課題があると考えられた(図3)。

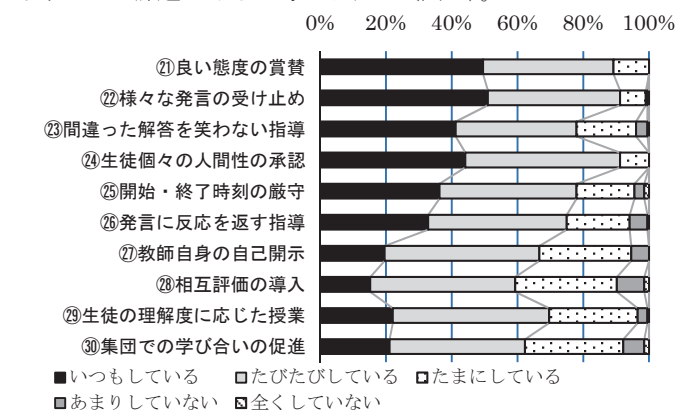


図3 共感的人間関係を育成することに関する手立て(n=204)

IV 総合考察

高等部専門学科に在籍する生徒の実態を踏まえ、今後の生徒指導の充実に向け、①生徒自身が学習活動や方法を自己選択できる柔軟性のある学習活動の展開、②多様な考えに触れる中で生徒同士が考えを伝え合う対話的な取組、③相手と折り合いをつけ、合意形成を図ることができるような学び合いの促進などを通じた自己指導能力の育成が求められよう。

(KOMATSU Ryohei, FUJII Yoshihiro)